

# 日本画制作を通して

川里 智子

## Through the production of Japanese paintings

Tomoko Kawazato

### Abstract

This is a report on the production of artworks that were exhibited from 2019 to 2022 at the Shinkou Art Exhibition, a public exhibition of Japanese-style paintings. The author paints Japanese-style paintings depicting scenes of her hometown and children on traditional washi paper using mineral pigments and other materials. Japanese-style paintings are painted with natural pigments on substrates such as paper, silk, wood, or clay walls using glue as a fixative. In this report, we will also discuss how she feels about her artworks and about Shinkou Bijutsuin.

**Keywords:** Japanese paintings, Momigami (crinkled washi paper), Shinkou Bijutsuin, Sanpu Ibaraki

### 1. はじめに

筆者は 2018 年から 2022 年にかけて、日本画の公募展「新興展」に日本画作品を出品してきた。大学時代日本画を専攻していたこともあり日本画制作を通して、表現領域の研究としている。本報告では 2019 年、2021 年、2022 年と出品した作品と共に制作過程、作品に対する思いや「新興美術院」について述べる。

### 2. 日本画と使用する材料について

筆者が制作している日本画とは「明治時代に西洋画に対してつくられた言葉である。今日において日本画という言葉は特定の絵画様式を示すものではなく、主に板、麻、絹、紙などの基底材に筆を使用し、墨を用い、顔料を膠<sup>にかわ</sup>で接着させて描く絵画」<sup>1</sup>と解釈されていることが多い。

描いている絵画の基底材として和紙を使用している。木製パネルに和紙を張りその上に描いている。描画する和紙には種類があり、筆者は土佐麻紙や雲肌麻紙を使用している。墨や顔料を使用して描き、顔料は岩絵具と水干絵具を使用し膠を定着剤として筆などで描いている。土佐麻紙は芋麻と楮を使用して作られており、紙自体は強靱で厚手の麻紙である。作品制作の中で揉み紙という技法を施すことが多いので、土佐麻紙の丈夫な紙を重宝

している。揉み紙技法については図 4 と図 7 の作品中背景に使用している技法で、図 7 にて説明する。雲肌麻紙は大麻と楮を原料として漉いた和紙で、厚手で丈夫なため日本画制作でよく使われている。<sup>1</sup>

顔料と膠<sup>にかわ</sup>について説明をする。顔料とは水に溶けない性質の色料で、鉱物や貝殻を粉碎したものである。<sup>1</sup> 図 5 の作品では、辰砂<sup>しんしゃ</sup>という赤色系顔料を用いて描いている。図中に用いた辰砂は天然に産出される鉱物（硫化水銀）を砕いて作られたものを使用している。<sup>2</sup> 岩絵具には天然の他にも、新岩、準天然、京上、エコ岩絵具、合成、新合成など種類がある。<sup>2</sup> 天然に産出される鉱物は数も少なく、価格も高いなどの理由で人工的に作られた岩絵具を使用することもある。新岩、準天然、京上、エコ岩絵具、合成、新合成が人工的に作られた岩絵具となる。

膠は画面に顔料などを定着させる定着剤となる。動物の皮や筋、骨などの中にコラーゲンとして含まれている成分により定着することができる。膠に熱を加えて液体化し水と混ぜて使用する。筆者は鹿膠<sup>しか</sup>を使用している。鹿膠は透明感があり、岩絵具の発色を鮮やかに見せてくれる。

### 3. 新興美術院について

表現領域の研究として、日本画の公募団体「新興美術院」に所属し作品を出品している。日本画を制作している会員たちと共に切磋琢磨しながら制作に励んでいる。新興美術院では新興展として毎年 5 月中旬、東京都美術館にて展覧会を開催し、日本画作品を展示している。出品作品に関しては後程紹介する。

筆者が所属している新興美術院について説明する。新興美術院は昭和 12 年に発足し、戦時下中断するも昭和 26 年に再興、美術界でも数少ない日本画のみの公募団体である。昭和 12 年、院展に文展が参加したことに反発して院展を辞し、<sup>いばらぎさんぶう</sup> 茨木杉風、<sup>こばやしそうきよじん</sup> 小林巢居人、<sup>きはら そしゅん</sup> 鬼原素俊等を初め 12 氏の連名で「自由拘束なき新興清新なる芸術を楊達する」という目的をもって、新たに公募団体 新興美術院を創立し、第 1 回新興美術展を開催した。<sup>3</sup>

創立者の中の一人である茨木杉風は「創立後精力的に出品し、十八年の第 6 回新興美術院展には戦争の影を見ながら、六曲屏風四双に「近江八景」を描いた大作を出品した。昭和 51 年の 8 月になくなるまで、新興美術院の役員として活躍し、その間昭和 33 年に日本学士会よりアカデミー賞が与えられ、日本学士会名誉会員となった。」<sup>4</sup>と石丸は述べている。井上は「杉風が描く水墨の世界は、実際の風景や風俗など写生を元に水墨の濃淡や線の肥瘦を使い分けて描いた穏やかなものであり、詩情を感じさせる」と述べている。<sup>5</sup>

茨木杉風は故郷の琵琶湖風景を好んで描いた。図 1 「沖の白石」は琵琶湖の地下にある硬い岩盤である溶結凝灰岩が画面中央に描かれた作品だ。琵琶湖の穏やかな波と空がゆったりとしたタッチで描かれている。淡墨と淡彩の中に豊かな情景を感じることができ、穏やかな時間が流れているような作品である。



図1 茨木杉風《沖の白石》1976（昭和51）年、滋賀県立美術館蔵

#### 4. 新興展での作品出品について

##### 4-1 「郷愁」について

第69回 令和元年（2019）第69回新興展にて出品した作品について述べる。2019年5月21日から5月27日まで東京都美術館で開催された。作品タイトルは「郷愁」（図4）である。作品サイズはS80でSとはスクエアの略で正方形である。80は号数で長さは145.5cm×145.5cmだ。制作過程を説明する。

図2は大下図である。大下図とは本制作する画面の大きさに合わせた実物大下図のことだ。<sup>6</sup> 人物の構図はやや左寄りに配置し筆者の息子を前にしてデッサンしたものだ。首から下は衣服を描いていたが、量感を意識しているうちに単純化させ衣服は省略した。様々な見方を鑑賞者に感じてほしい為、あえて感情を表現しないようにした。背景はウッドデッキの木目を木炭でフロッタージュしたものだ。フロッタージュとは凹凸のある部分に薄い紙をおき、鉛筆などを斜めに持ち描くもので、形や模様が出る美術表現技法である。フロッタージュをしたことで、大きな樹木の前にいるかのような印象つけることができた。



図2「郷愁」の大下図

図3は男の子の胸中の風景を描いた小下図である。小下図とは、本画を制作する前に作る下絵である。<sup>6</sup> 筆者の故郷である福岡県久留米市には、柳坂曾根の欏並木がある。昭和39年に県の天然記念物に指定された美しい欏並木だ。欏の実（くわ）は西日本の特産物のひとつで、18世紀から栽培されてきた。筆者は大学時代から故郷の風景として、欏並木を描いてきた。郷土の画家たちも欏の絵を描いている。松田諦晶「欏紅葉（音羽護国寺）」（1914）、坂本繁二郎「欏の月」（1967）、伊東静尾「黄欏」（1935）など欏を描く画家は多

い。坂本繁二郎は 1931 年八女に郷里久留米から転居している。八女は「木櫨の産地でもあり、晩秋から初冬にかけての櫨の木紅葉はみごとだったと伝えられている。初秋の頃の黄金色の櫨を坂本は特に好んでいた。」<sup>7</sup>と久留米市美術館の森山は述べている。青木繁は故郷久留米について「わが国は 筑紫の国や 白日別 母います国 櫨多き国」と詠んでいる。芸術家にとって櫨は創作意欲を湧きたてられる題材となりうると思われる。櫨を一年間観察すると様々な表情があることがスケッチする中で分かった。図 3 は夏から秋にかけてだんだんと紅葉している様を描いた。葉を一枚一枚細かく描くのではなく、葉の流れを描いた。さらさらと画面の中から音が聞こえてくるような絵画を目指していきたい。

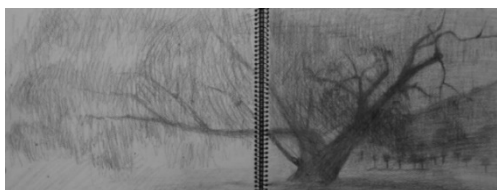


図 3 「郷愁」の小下図 久留米の櫨

図 4 の作品は完成作品であり「新興美術院第 2 席」を受賞した作品である。青緑系の下地に胡粉<sup>ごふん</sup>を塗り、揉み紙技法を施し、偶然できた形や色彩から人物の感情表現を現した。

過去制作した作品で墨線を重ねたことで人物の肌が暗くなったことを受けて、パステルや色鉛筆なども使用し、明るい色彩で線描を繰り返し描き人物の存在感を現している。岩絵具「新岩 桜色」や「天然 メノウ」などの明るくて淡い色調を肌の表現として使用し、男の子の胸に櫨の風景を描いた。図 3 の小下図では葉に緑色が残っているが、図 4 では紅葉している。鑑賞者に印象付けるために「本朱 鎌倉朱」と岩絵具「新岩 岩緋<sup>いわひ</sup>」を櫨の葉に使用している。

美術評論家の松原から「まだ小学生高学年に思える男の子、どこから転校してきたのか友達と遊んだ土地をふと思い出す。それを胸部に描いているところがいい。」<sup>8</sup>と言葉を頂いた。筆者の心の中にはこれからも故郷の風景を心に抱き、胸の内がふっと鑑賞者に伝わるような作品を制作していきたい。

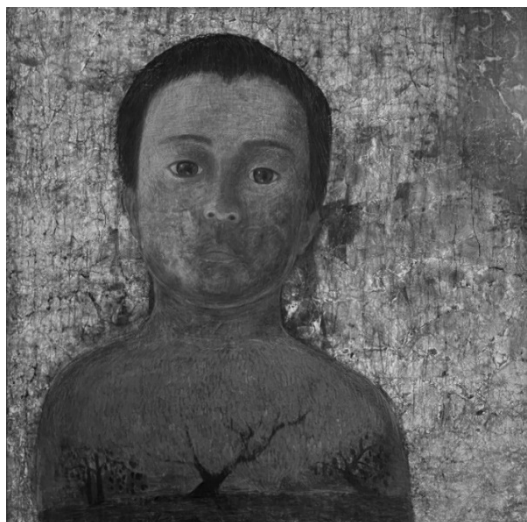


図 4 川里智子《郷愁》2019

#### 4-2 「むすめと」について

第70回 令和3年(2021)第70回新興展に出品予定であった作品「むすめと」(図5)について述べる。第70回新興展は当初開催予定だったが、作品を東京都美術館に搬入して後に新型コロナ感染拡大防止の観点から新興展は中止となった。東京都美術館も休館することとなったため展示はできなかったのだが、審査はしてもらい「S氏賞」を受賞した。

題名は「むすめと」で日本画で制作しサイズはS80である。基底材に雲肌麻紙を用いている。背景は岩絵具「天然辰砂」や「本朱 鎌倉朱」など赤い顔料が豊富に使われている。「辰砂」の前に表記されている「天然」とは、天然に産出される鉱物(硫化水銀)を砕いて作ったものという意味がある。<sup>2</sup> 「郷愁」と同じようにここで紹介している「むすめと」は久留米市にある柳坂曾根の樋並木で生まれた作品だ。現地でスケッチしていた時、ついてきた娘をデッサンした。樋の葉と娘の髪の毛が揺れる様子が印象的だった。紅葉した背景と娘を重ね合わせることで美しさを表現した。

背景のグレーの模様がある部分に注目してもらいたい。模様には墨を使用している。全体的に墨を塗り、乾かないうちに塩を撒いている。塩の部分の色が抜け白い星状の斑点ができる。塩を全体的に撒いているため、表面は凸凹している。凸凹していることで、岩絵具の定着がよくなり、油絵のように重ね塗りすることができた。新興展を終え美術評論家の松原より「より深い世界を目指す為、構成力と描画力を高めて欲しい。ここでも写真からの制作と感覚の観念描写の作品が目につく。やはり基本はしっかりとした写生、デッサンを身につけることが肝要だ。」<sup>3</sup>と指摘をうけた。本人を目の前にしてデッサンをしているが、仕上げの段階ではイメージの中の娘を描いている。基本を忘れずに実物をしっかりと観察し、デッサン力を向上させながら、作品作りに取り組んでいきたい。



図5 川里智子《むすめと》2021

#### 4-3 「黒群青の山並み」について

第71回 令和4年(2022)第71回新興展は5月20日から5月27日、東京都美術館にて開催された。今回出品したのは「黒群青の山並み」日本画 S80 である。(図7) この作品の基底材は土佐麻紙で揉み紙技法を施している。(図6)

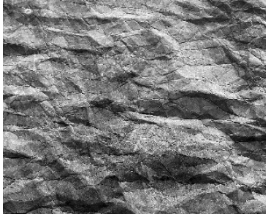


図6 揉み紙技法を施した和紙

図6は土佐麻紙の上に水干絵具(水浅黄や群青)を塗り、乾いた上から胡粉を塗っている。完全に乾いてから手で和紙を揉んでいく。破れないように用心しながら揉んでいくのだが、土佐麻紙は厚みのある和紙で強い力を加えないといけないので苦労する。揉んで折れ曲がった部分から白色の胡粉が剥がれ落ちて、蜘蛛の巣のような絶妙な模様が生まれる。狙い通りの模様にはならないため偶然生まれた模様を楽しむ事とする。図6を見てほしい。表面が凸凹し、絵具がのりにくいのでアイロンで表面のしわを伸ばしてから木製パネルへ水張りをしている。

完成した揉み紙によりイメージできたのが、青空であった。アトリエとしている場所の目の前には耳納連山が高々と立っている。耳納連山の山並みと青空が連想できた。耳納山脈は筑後山地の北端に位置し、高良山、耳納山、発心山、鷹取山と東西に約30kmにわたって連なる起伏の多い山地である。また屏風のように切り立っていることから「屏風山」とも言われている。この絵は2月から4月にかけての山並みを描いている。手前にある赤い杉は尾花がついているので赤く見え色彩が美しい。岩絵具の「天然<sup>たいしや</sup>岱赭」を使用して描いた。「辰砂」や「鎌倉朱」と比べると茶色を帯びて見えるが、尾花のついた杉の様と似合う。

作品名の中にある「黒群青」の山並みは岩絵具の「新岩 黒群青」を全体的に使用していることから名を付けた。新岩とは人工的に作られた石を細かく砕いたもので使いやすく、変色などの心配も少ない。耳納連山はその時々で色彩が変化していくが、筆者が心を惹かれるのが冬から春にかけて澄んだ空気の中、青みがかった山だ。この色彩に近いと感じたのが岩絵具の「黒群青」であった。

美術評論家の松原より「同じ景での最高のシチュエーションを描いて欲しい」<sup>10</sup>と言葉をもらった。これからも心の中にある故郷の風景を描いていきたいと感じている。

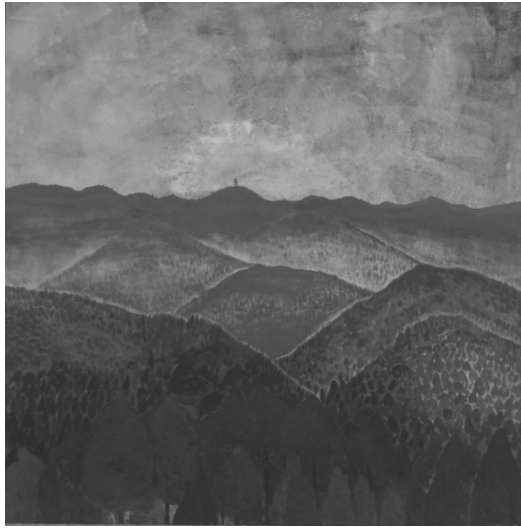


図7 川里智子《黒群青の山並み》2022

### さいごに

自身にとって身近な人物や風景をこれまで描いてきた。それは新興美術院の創始者の一人である茨木杉風や九州の画家である松田諦晶や坂本繁二郎なども故郷の風景などを描いている。身近な人物や風景を描く事でその美しさや新たな魅力に気付く事もある。普段見慣れた風景であっても、制作者にとっては、創作意欲の源になりうるものだと感じている。筆者にゆかりのある諸先輩方から多くの事を学び今後の制作への励みとしていく。

最後に本報告書にご協力頂きました、一般社団法人 新興美術院の皆様、滋賀県立美術館 学芸員の皆様、茨木浩一様、厚く御礼申し上げます。

### 引用文献

1. 東京藝術大学大学院文化財保存学日本画研究室（2007） 図解 日本画用語辞典 株式会社東京美術 p8、33
2. 喜屋（2016）日本画の材料 第8版 p2
3. 一般社団法人 新興美術院（2022） 第71回 新興展 p5
4. 石丸正運（1980） 近江文化業書 7 近江の画人たち p145
5. 井上ひろ美・大原由佳子・國賀由美子・高木文恵・森岡榮一・山口真有香（2020） 近江の画人 海北友松から小倉游亀まで p139 サンライズ出版株式会社
6. 編集者 小川幸治（2008） 狩野派絵師から現代画家までに学ぶ 日本画 画材と技法の秘伝集 p236 p238
7. 森山秀子（久留米市美術館）（2019） 没後50年 坂本繁二郎展 p162
8. 美術評論家協会会員 全日本美術新聞社 主幹松原清 『第69回新興展 展評』
9. 美術評論家協会会長 全日本美術新聞社 主幹松原清 『第70回新興展 展評』
10. 美術評論家協会会長 全日本美術新聞社 主幹松原清 『第71回新興展 展評』